

# 西大寺旧境内の調査

## ―第597次

### 1 はじめに

本調査は、西大寺小坊町における集合住宅建設にともなう発掘調査である。当初、南北17.3m、東西8.5mの調査区を設定したが、のちに1.0m南へ拡張し、合計155.55㎡を調査した。調査期間は2018年2月20日から3月30日である。当該地は平城京右京一条三坊七坪にあたり、西三坊坊間路東側溝の計画ラインが調査区内に入ることが想定された。本調査区の南方の西大寺防災施設工事にともなう調査では、西三坊坊間路西側溝に比定される溝を検出している（『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書1990』）。

### 2 基本層序

基本層序は、地表から近現代造成土（約60cm）、その下に部分的に遺物包含層である茶灰土（10～15cm）があり、褐色粘質土（地山）となる。遺構検出は地山上面（標高約74.8m）でおこなった。

### 3 検出遺構

検出した主な遺構は、中世以前と考えられる柱穴1基、および中世以降の南北溝1条、L字溝1条、方形粘土貼遺構2基、土坑1基である（図228）。

**掘立柱SX1150** 調査区南半で検出した大型の柱穴（巻頭図版8、図230）。出土遺物が希薄であり、遺構の重複関係から中世以前の遺構と判断した。南北幅2.6m、東西幅2.2m、深さは検出面より約2.1m。埋土は、概ね3層に分けられるが、間を置かずに埋め立てられたと考えられる。掘方からは柱根をはじめ14点の部材が出土した<sup>1)</sup>。また、掘方中央に確認できる抜取穴とみられる部分（後述のように支柱の抜取穴の可能性ある。）からも腐食の激しい部材片が1点出土している。柱根は掘方の西北隅で、直立した状態で出土した。最大径0.69m、残存長約1.5m、樹種はヒノキ。柱穴の西壁と柱根の間隙は0.1mほどで、意図的に西壁に寄せて立てられたと考えられる。柱の底面に板材を楔状に入れ、周囲には井桁を組むように木材を配置し、根固めをおこなっていた。木材の

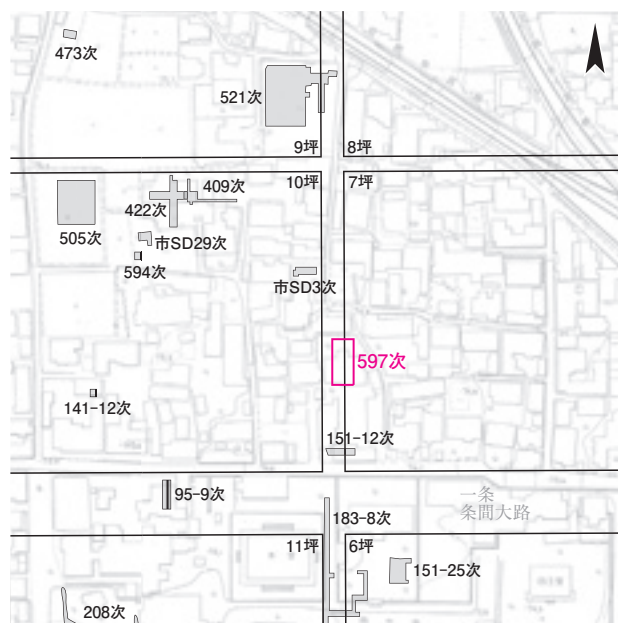


図227 第597次調査区位置図 1：3000

多くは建築部材を転用したものとみられる。調査区内で北・南・東方に同一規模の柱穴が展開せず、建物となる可能性は低いと考えられる。

**南北溝SD1146** 調査区中央を南北に縦断する素掘り溝。幅約1.1m、深さ約0.3m（図229）。西三坊坊間路東側溝となる可能性を踏まえ、埋土を3層に分け遺物を取り上げた。最下層の灰粘土層からは、12世紀後半～14世紀前半の土器が多量に出土し、かつ奈良時代の遺物が少数であったことから西三坊坊間路東側溝の可能性はあるものの、最終的な埋没は中世に降る。L字溝SD1147及び方形粘土貼遺構SX1148・SX1149と重複関係にあり、これらより古い。

**L字溝SD1147** 調査区南半で検出した素掘り溝。調査区の南・東方に展開する。幅約0.9m、深さ約1m（図229）。L字溝の東西方向の範囲には底から0.2～0.3mの位置に板材（スギ）が敷かれており、箸などの木質遺物が遺存していた。また最上層からは11世紀後半から15世紀後半頃の特徴を持つ土師皿が約200点まとまって出土した。

**方形粘土貼遺構SX1148** 調査区中央部で検出した方形の遺構。南北最大幅約3.9m、東西幅2.6m以上、深さ約0.4m。遺構底面に白色粘土を貼る。白色粘土の中央部分には灰色砂が堆積する。方形粘土貼遺構の東辺には北で西に振れる石列が位置する。白色粘土の上面からは中世頃の瓦片が多数出土した。なお、遺構の性格は不明である。L字溝SD1147と重複関係にあり、これより新しい。

**方形粘土貼遺構SX1149** 調査区南半で検出した方形の

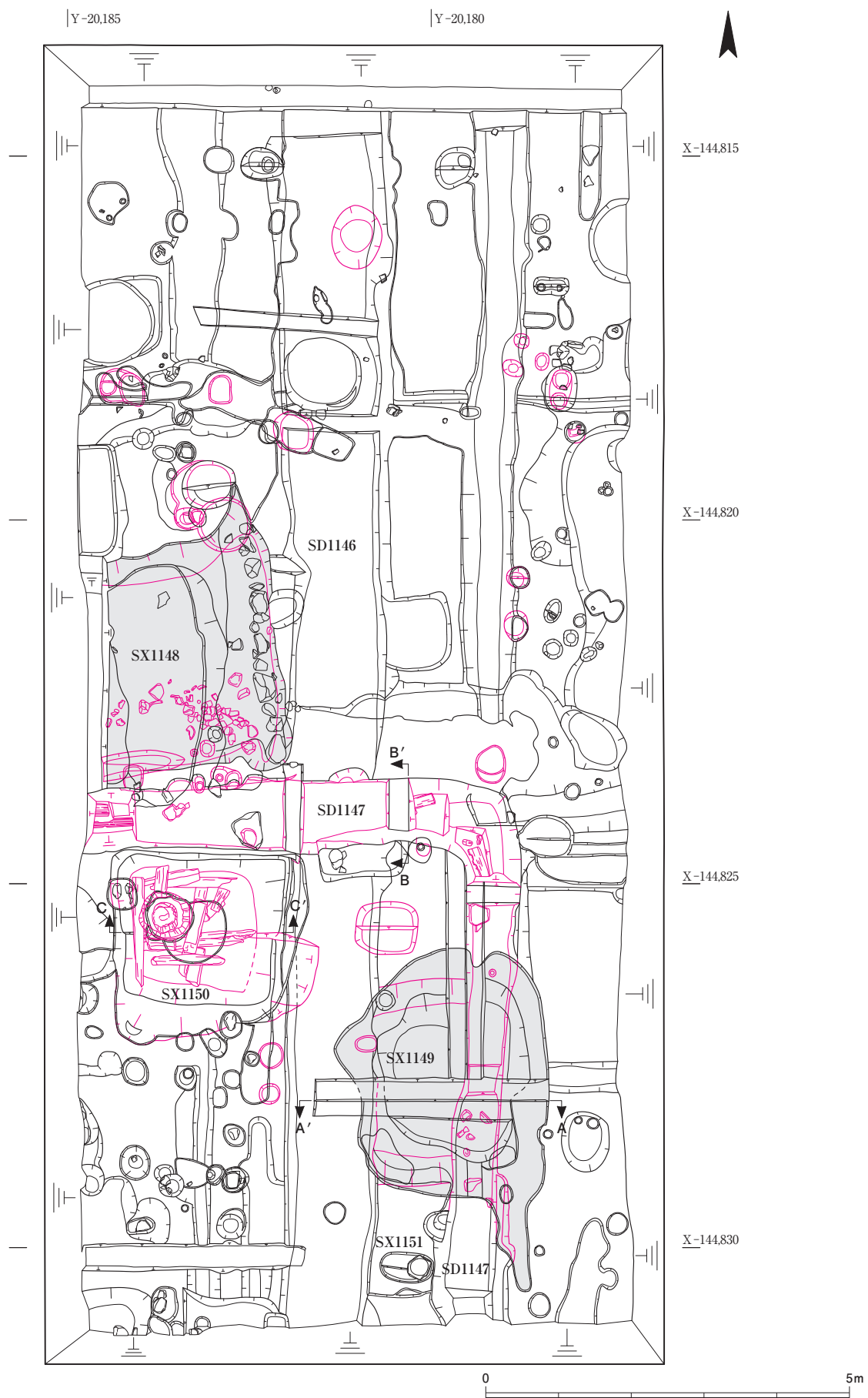


図228 第597次調査区遺構図 1 : 80

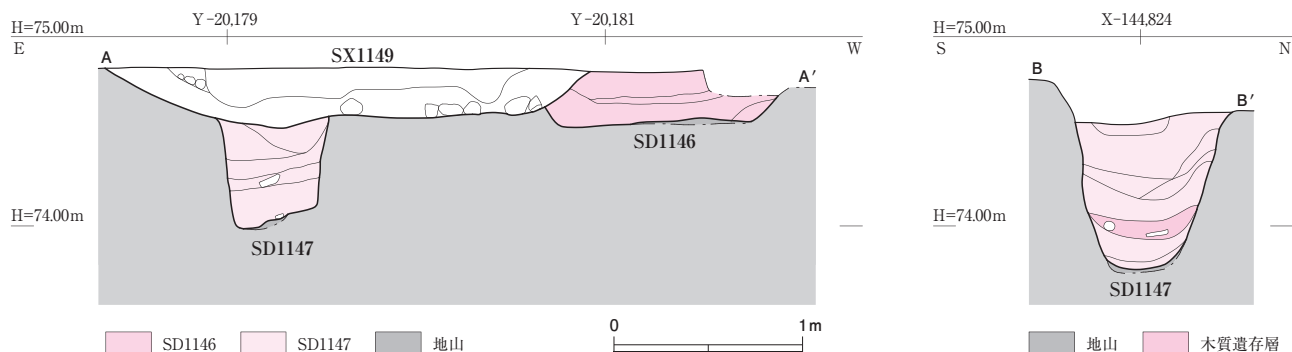


図229 第597次南北溝SD1146・L字溝SD1147・方形粘土貼遺構SX1149断面図 1:40

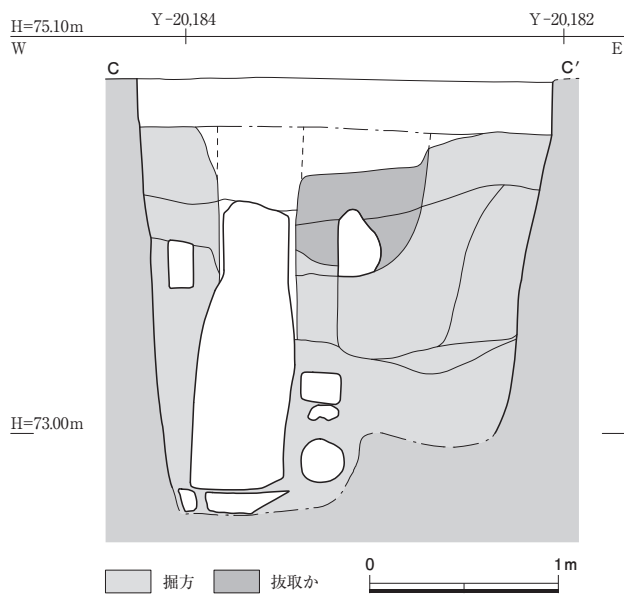


図230 掘立柱SX1150 断面図

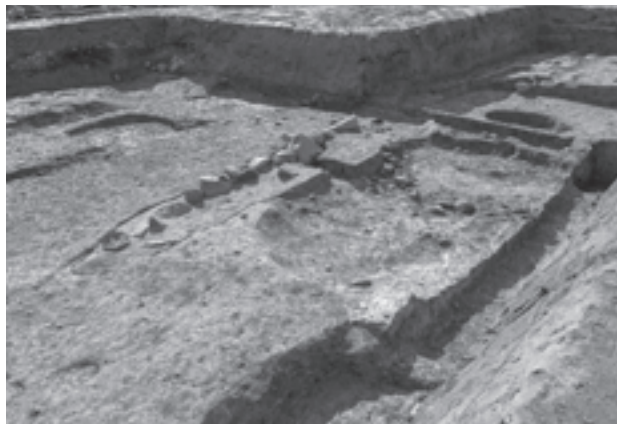


図231 方形粘土貼遺構SX1149 (北西から)

遺構(図231)。中央部で検出した方形粘土貼遺構SX1148に規模が似る。南北最大幅約4.6m、東西幅約2.9m、深さ約0.3m。遺構底面に暗灰黄～白色粘質土を貼る。粘質土中に10cm大の石や中世頃の瓦を多く含むが性格は不明。南北溝SD1146、L字溝SD1147と重複関係にあり、これらより新しい。

**埋甕SX1151** 調査区南端で検出した土坑。南北約0.4m、東西約0.7mの楕円形の掘方をもち、深さ約0.1m。内部に中世の甕が据えられていた。(浦 蓉子)

#### 4 出土遺物

遺構埋土から土器類および瓦磚類、箸などの木製品や大型部材が出土した。

**土器・土製品** 本調査では整理用コンテナ17箱分の土器・土製品が出土した。中世の土師皿・瓦質土器・瓦器が主体で、そのほか奈良時代の土師器・須恵器を含む。掘立柱SX1150など主要遺構からも奈良時代の土器が出土しているが細片のみのため、詳細な年代の把握は難しい。ここでは、中世の土器・陶磁器類を図示する。

図232は南北溝SD1146 出土の土器類。1・2は土師皿である。1は底部中央付近に焼成後穿孔を有するもので、奈良市高天町遺跡SK638・642出土土師皿などに類例がある<sup>2)</sup>。2はナデにより外面の底部付近に段差を形成する。3・4は瓦器椀。内面のみにミガキ調整がみられる。いずれも川越俊一編年<sup>3)</sup>の第Ⅲ段階E型式に該当する。5は注口を有する瓦質土器。外面は全体的にミガキを施す。以上のように南北溝SD1146は、14世紀前半の土器類が主体である。

図233はL字溝SD1147出土の土器類である。1～12は土師皿。1・2は口縁部が緩やかに立ち上がる形状のもの

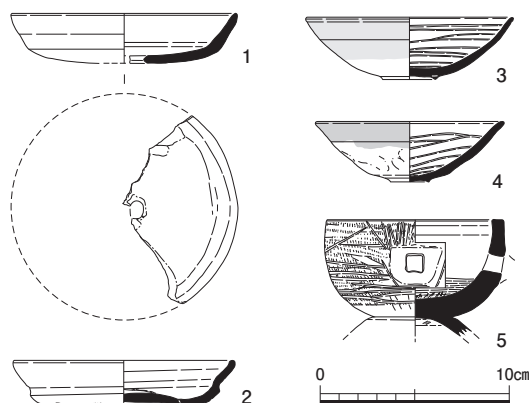


図232 第597次調査SD1146出土土器

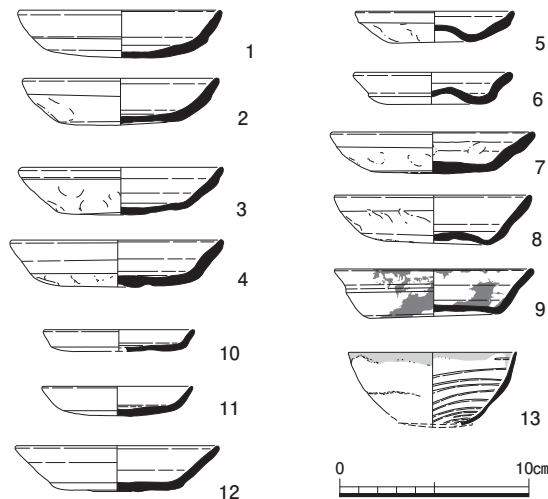


図233 第597次調査SD1147出土土器

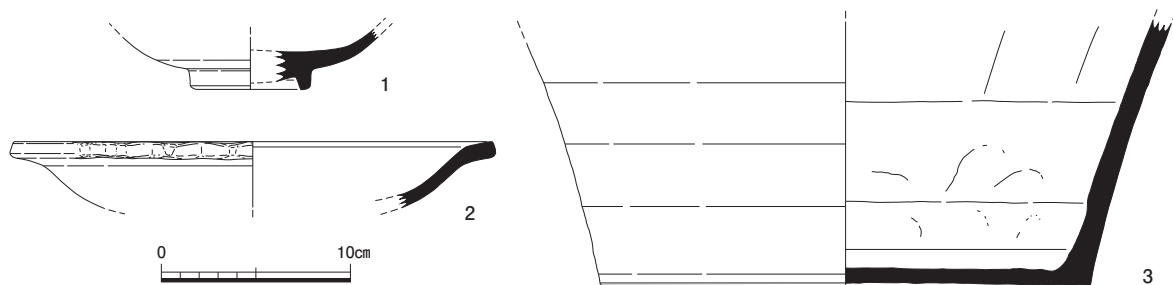


図234 第597次調査出土土器・陶磁器 1 : 4

の。外面の口縁端部にナデを施し、底部には指頭圧痕が残る。3・4は平らな底部から口縁部がやや屈曲するもの。外面の底部には指頭圧痕を残す。5・6・7・8・9はいわゆる「赤土器」である。底部から口縁部がより直線的に屈曲する。5・6のように底部中心が明瞭に立ち上がるものもある。9は灯明器として使われた痕跡を残す。10は器高が低くなり、底部から垂直に近い方向に口縁部が立ち上がる。11・12はいわゆる「白土器」である。外面の側面から内面はナデを施し、胎土は黄白色で精良である。13は瓦器碗。川越編年の第Ⅳ段階B型式に該当する。以上のように、L字溝SD1147は15世紀ごろまでの土器類を含み、出土土器のなかで1・2→3・4→5・6・7・8・9という、いわゆる「赤土器」出現に至るまでのおよそその変遷をたどることが可能な資料である。

図234の1は攪乱、2は方形遺構SX1149、3は土坑

SK1151からの出土である。1・2は龍泉窯系の青磁。1は盤の底部とみられる。畳付から高台内は無釉である。2は口縁部が屈曲し、口端部は波状を呈する。明代の龍泉窯などでみられる菱花口盤<sup>4)</sup>の可能性もある。3は瓦質土器の深鉢。佐藤亜聖氏分類<sup>5)</sup>では深鉢形土器Ⅳ類に該当し、14世紀中ごろから16世紀第3・4半期(佐藤編年の第3・4期)とみられる。

以上のように、これらの土器・陶磁器類は西大寺近辺における当該期の様相を理解するうえで重要な資料であると評価できる。

(丹羽崇史)

**瓦磚類** 本調査で出土した瓦磚類の一覧を表38に掲げた。出土遺構の時期に対応して、その大半が鎌倉～室町時代の瓦である。最も多く軒瓦を出土した遺構は方形粘土貼遺構SX1149で、16点が出土している。

奈良時代の軒瓦は型式不明のものを含めても21点に過ぎない。ただし、それらの多くは西大寺所用瓦であ



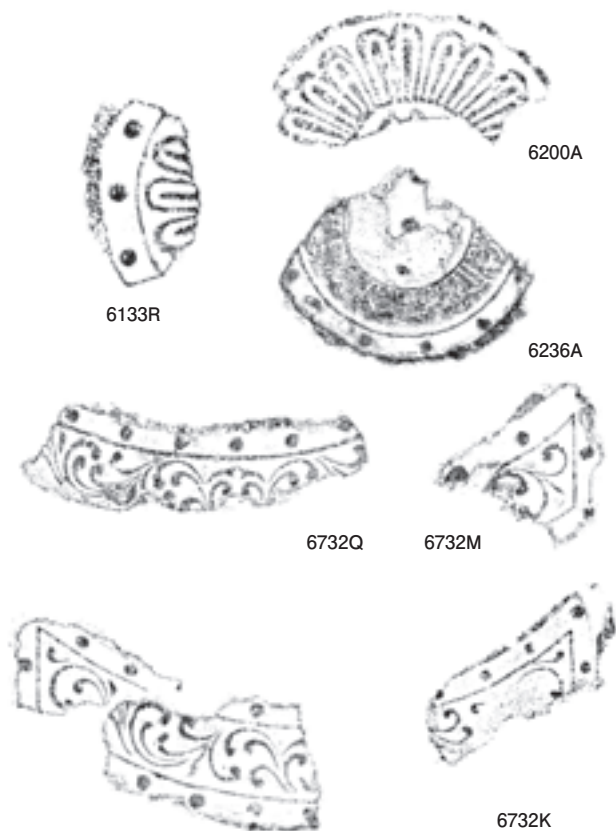


図235 第597次調査出土瓦 1 : 4



図236 第597次調査出土半円状鉄製品

る。例えば、6133R-6732Mは薬師金堂院周辺からの出土が多く、6236A-6732Qは東塔、6732Kは西塔の所用瓦と推定されている。このうち、6732Kの1点は、掘立柱SX1150の板材の下から出土しており、SX1150の年代を考える上で興味深い。なお、6200Aも現状で西大寺でのみ出土する軒丸瓦である。(林 正憲)

**鉄製品** 方形粘土貼遺構SX1149からは半円形の鉄製品が1点出土している(図236)。残存幅4.4cm、高さ3.0cm、厚さ0.3cm。形状は平城第520次調査で出土した火打金と

表38 第597次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6133	R	1	6667		1	平瓦(刻印)	2
6200	A	1	6732	Fb	1	(中世、刻印)	1
6236	A	2		K	6	(中世、文字タタキ)	1
	?	1		M	1	隅切平瓦(奈良)	1
二巴(鎌倉)		1		Q	1	鳥袈	1
巴(鎌倉)		2		?	4	面戸瓦(奈良)	1
(中世)		9	西 307A(鎌倉)		1	蟹面戸瓦(古代)	1
古代		7	西 330A(室町)		1	棟飾り	1
平安		2	西 348A(室町)		1	鬼瓦(中世)	1
中世		2	西 350A(室町)		3	用途不明道具瓦	1
時代不明		4	鎌倉		4	(近世)	1
			中世		9	用途不明瓦製品	1
			型式不明(奈良)		2	磚	1
			時代不明		3		
軒丸瓦計		32	軒平瓦計		38	その他計	
丸瓦			平瓦			凝灰岩	
重量		167.255kg	重量		12.336kg	重量	
点数		1020	点数		11	点数	



図237 第597次調査出土砥石

類似し(『紀要 2015』)、欠損した火打金の可能性がある。

**石製品** 本調査区からは14点の砥石が出土した。出土層位及び遺構は、遺物包含層とした茶灰土や南北溝SD1146、L字溝SD1147、方形粘土貼遺構SX1148などから出土している(図237)。中でも泥岩で作られた一群には規格がみられる。泥岩製の砥石は8点出土しており、長さは3~10.5cm、幅3.3~3.8cm、厚さは0.5~1.1cm。他にも粘板岩等の砥石が確認できる。大きいもので長さ17.0cm、幅11.4cm、厚さ5.9cm。重さは約1.3kg。

**冶金関連遺物** 本調査区からは少数であるが冶金関連の遺物が出土している。L字溝SD1147からはふいごの羽口片や約6cm大の褐色鉄滓片1点、炉壁の小片が数点、南北溝SD1146からは長さ6.8cm、幅5.0cm、厚み1.9cmの椀形鉄滓片が1点出土している。

**木製品** 木質遺物が出土したのは主にL字溝SD1147の木質遺存層および掘立柱SX1150埋土内である。以下、遺構ごとに内容を述べる。

L字溝SD1147の木質遺存層(図229)からは曲物側板の破片1点、部材片4点、箸9点が出土している。図238-1は両端を細く削り出しており、完形である。全体的に面取りされており、断面多角形状を呈する。長さ20.6cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm。2は両端を細く削りだしており、完形である。断面多角形状。長さ19.5cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm。3～6は一端が折損している。それぞれ端部が細く削りだされている。断面多角形状。3は残存長16.5cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、4は残存長17.3cm、幅0.6cm、厚さ0.7cm。5は残存長13.1cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm。6は残存長15.0cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm。黒色の付着物があるが、詳細は不明である。

掘立柱SX1150埋土内からは多くの木材の削りかすが出土しており、一部を図化した(図239)。長さは3.9～6.7cm、幅はおおよそ4.1～5.2cm。厚さは図239-1、2が薄く0.5～0.6cm、3～5が厚く1.0～1.5cm。1、2は他のものに比べ薄く、木目がつまる。下端は緩い傾斜をもって断ち落されており、刃こぼれの痕跡から、木の繊維方向に対して刃が斜めに入った様子を復元できる。断面は平行四辺形を呈するが、背面は丸みを帯びており、木材の表面をチョウナで斫った際の木屑と考えられる。図239-3～5は厚みがあり、断面が平行四辺形もしくは台形を呈する。1、2に比べ年輪はやや粗い。5は3点の資料が接合した。そのため、これらの削りかすはある程度のまとまりをもった一群であると考えられる。削りかすに厚みがあることから、木の表面を研るチョウナのようなものでなく、ヨキなどの縦斧もしくは鑿などを利用した際のものと考えられるか。これらの削りかすが埋土内から見つかる理由としては、掘方内の木柱及び根固めの木材を加工した際のもの、もしくは別の部材の屑を意図的に入れ込んだ可能性が考えられる。

**大型部材** 大型部材は、すべて掘立柱SX1150埋土内か

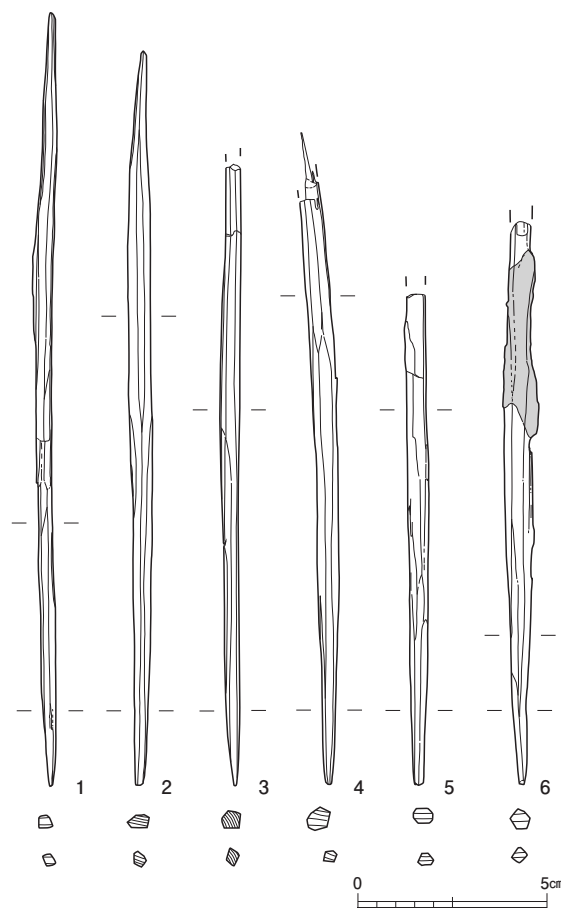


図238 L字溝SD1147出土木製品 1:2

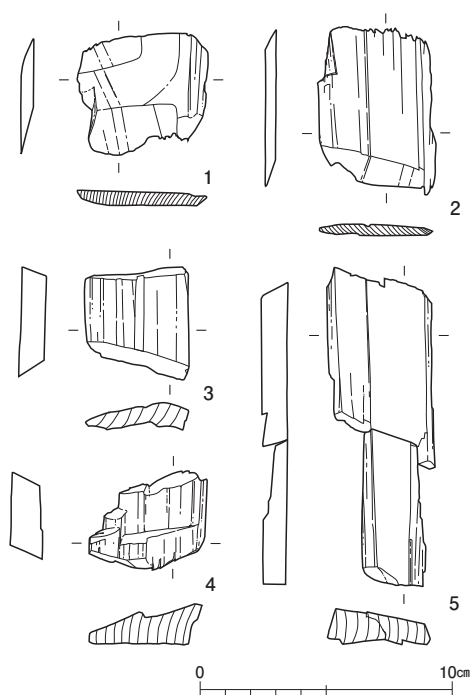


図239 掘立柱SX1150出土木端 1:3

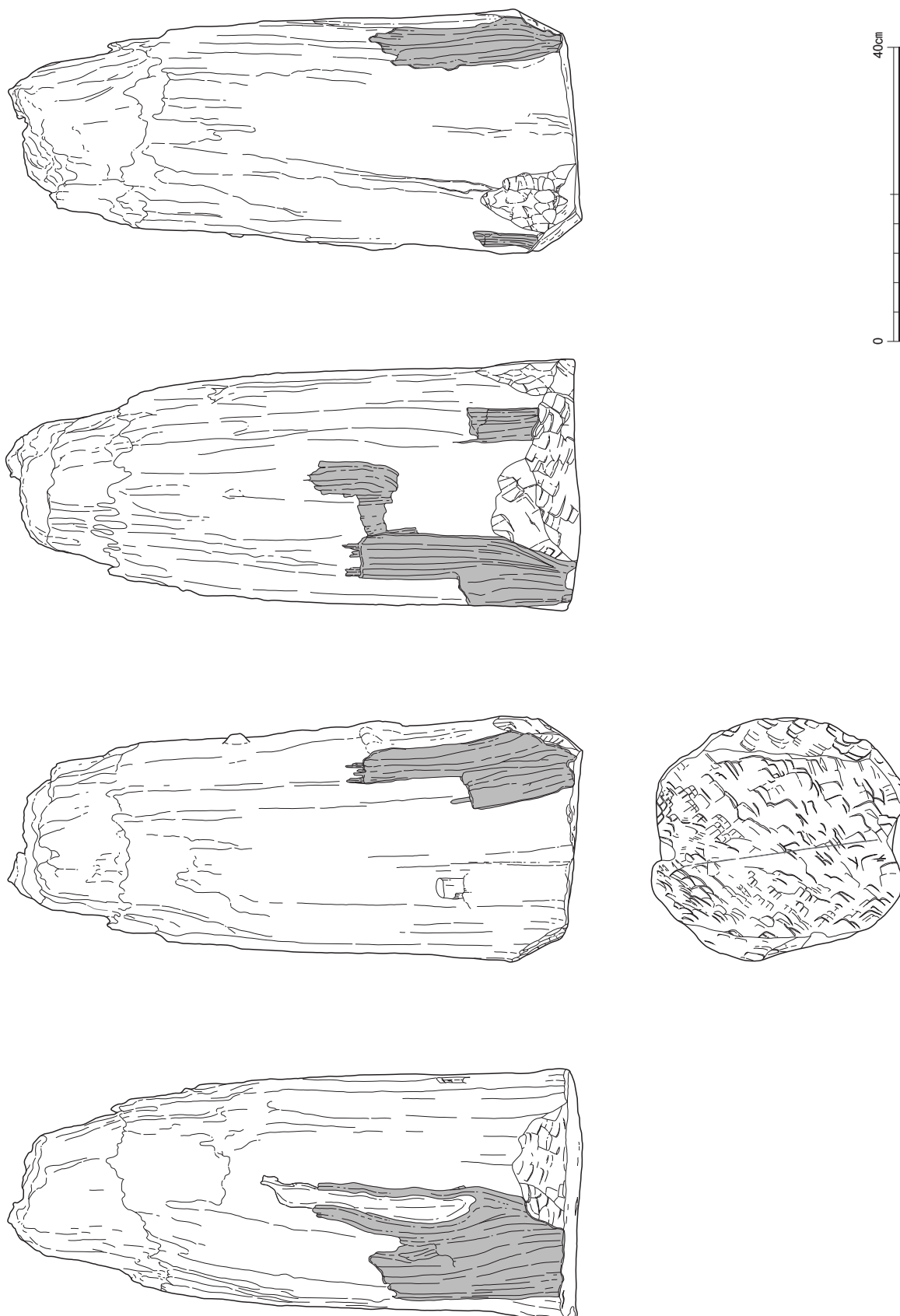


图240 SX1150出土柱根实测图 1 : 8

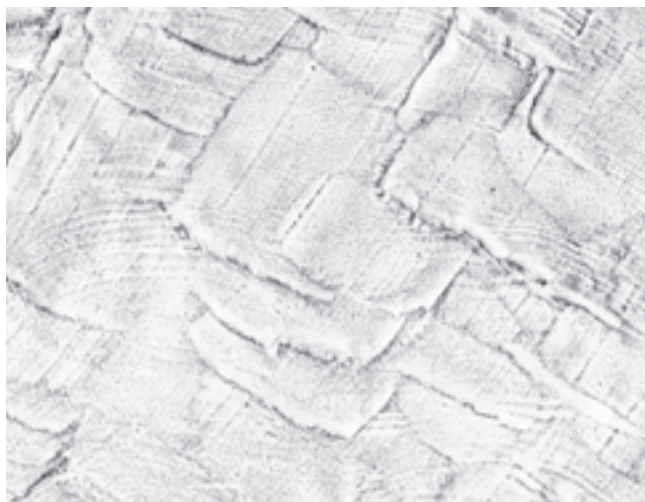


図241 柱根の伐採痕跡拓本（拓本） 1：2



図242 柱根の底面加工の痕跡（拓本） 1：2

らの出土である。掘方からは14点の部材が出土した。図240は直径約70cm、残存長約150cmの柱根である。上部は腐食が激しい。ヒノキ<sup>6)</sup>。柱根の周囲には樹皮が残る。側面には2方向に斜めの切断痕跡が残されており、伐採痕跡と考えられる（図241）。底面には平滑にするためと考えられるストロークの短い加工痕跡が確認できる。主に柱根周辺から中心に向かって、様々な方向から加工される様子が確認できる（図242）。加工工具については伐採痕跡から5.1～5.6cm以上、底面の切断痕跡から4.8～5.1cm以上の刃幅を持つヨキなどの縦斧が想定できる。底面には柱根の心を通るように墨線が引かれている。十字ではなく、一方向にのみ引かれている。糸を激しく弾いたことによる墨の飛沫が墨線に沿って確認できる（図243）。

（浦）

**建築部材** 掘立柱SX1150の柱根を根固めしていた部材として、13点が出土した（表39）。そのうち6点は自然木に近い非建築部材であり、ここでは建築部材と認められる以下7点を報告する。

掘立柱SX1150より出土した建築部材7点は、丸太材、直方材、五平材など、さまざまな形状を呈し、全長が40～80cmのものが多い。またヨキやチョウナなどの加工痕跡が比較的明瞭に確認できた。

図247-1は心去材の角材で、上面は割肌とし、転用時の割裂とみられる。木口を除いて、加工痕は不明瞭ながらも平滑に仕上げる。木口はともに腐食が進む。北側面には転用以前の加工とみられる段差があり、半裁以前は板溝状を呈していたと考えられる。下面には両側面に幅



図243 柱根の底面の墨線痕跡（赤外線画像）

3.9～5.5cmの面取り状の加工があり、転用以前は側面に板溝をもつ、面取りを施した心持の柱材と考えられる。

図247-2は心持の丸太材で、両端木口では末口（図左）を斜めに、元口（図右）を垂直に切断する。木口の加工痕は腐食により不明瞭である。上下面は平滑に仕上げられ、チョウナによる加工とみられる。側面は丸みをおび、当初面を残しているとみられるが、加工痕は不明瞭である。両側面とも元口端部に長さ約9.0cm、幅約4.0cmのホゾ穴をもつ。ホゾ穴はほぼ対称の位置にあり、部材形状ともあわせて、板壁の棧の仕口をもつ丸柱を切断して転用したものと考えられる。



表39 SK00000出土部材一覧

図番号	法量 (mm)			木取り	樹種	備考
	長さ	幅	高さ			
—	1,036	152	98	板目	広葉樹か	非建築部材
1	423	205	140	板目角材	針葉樹	転用材
—	1,577	175	250	心持角材	針葉樹	雑作材か
2	400	205	161	心持丸太材	針葉樹	転用材
3	742	213	135	心持角材	針葉樹	転用材
—	512	172	99	心持丸太半裁	—	非建築部材
—	859	127	137	心持材	クリ	非建築部材
—	1,644	121	170	心去材	広葉樹か	非建築部材
—	1,232	143	167	心去材	クリ	非建築部材
4	560	229	142	心去丸太半裁	針葉樹	転用材
5	1,324	189	204	心持丸太材	針葉樹	転用材
6	422	103	69	板目	針葉樹	転用材
7	830	233	129	心持角材	針葉樹	転用材



図244 板溝痕跡 (1)



図245 部材の圧痕とノミ痕跡 (6)



図246 端部の杭状加工とチョウナ痕跡 (7)

図247-3は心持の角材で、上下面とも平滑に仕上げ、下面はチョウナの加工痕が明瞭で、エツリ穴の加工も残る。南面木口(図左)はヨキで杭状に切断し、北面木口(図右)はヨキで垂直に切断する。両側面はともにチョウナによって平滑に仕上げる。当初は角柱で、転用時に半裁して根固めの部材に転用したものとみられる。

図247-4は心去材、半円形の断面を呈す。上面には他の部材とのあたり部分がイキ面として残り、加工痕は不明瞭だが、平滑に仕上げる。下面は割肌とする。東側面には幅6.0cm、高さ4.1cm、深さ3.8cmの仕口をもつ。末口(図左)はヨキによる切断痕が明瞭で、切断工程が3段階とわかる。元口(図右)は腐食が進むものの、一部にヨキの加工痕が確認できる。丸柱を半裁して転用したもので、ホゾ穴は、方立と柱とを固定するための仕口と考えられる。部材寸法から、当初は直径7寸弱の柱であろう。

図247-5は心持の丸太材で、丸柱の転用材とし、やや楕円形の断面を呈す。上面および東側面に位置を揃えて2カ所ずつ釘穴が確認できる。下面には6カ所、西側面には4カ所のホゾ穴があり、下面のひとつには埋木がさ

れ、別のひとつは2つのホゾ穴が同位置に重なる。下面と西側面の間には元口(図右)にホゾ穴をもち、埋木がされる。元口はヨキによって斜めに切断し、末口(図左)はヨキで垂直に切断する。ともに仕口を切るため、根固め部材に転用時の二次加工であろう。末口から29.5cmの位置に幅15.0cmの圧痕があり、釘穴と位置が揃うことから、長押の痕跡と考えられる。下面と西側面には風食差があり、柱として使用された際の内外部の違いとみられ、ホゾ穴は壁小舞の仕口と考えられる。

図247-6は心去材で、くさび形の形状を呈す。上面はノミで平滑に仕上げ、北面木口はヨキで粗く切断する。上面には南面木口(図右)より9.3cmの位置まで圧痕が確認でき、出土時は他の部材と接していなかったが、くさびとして使用されたことがわかる。東側面には北面木口(図左)から22.7cmの位置に、高さ4.0cm、幅2.8cmのエツリ穴状の仕口をもつ。当初は垂木で、両端を切断後に半裁して、くさびに転用したものと考えられる。

図247-7は心持材で、上面は割肌とし加工痕は不明瞭ながらも平滑に仕上げ、支柱による圧痕とエツリ穴があ

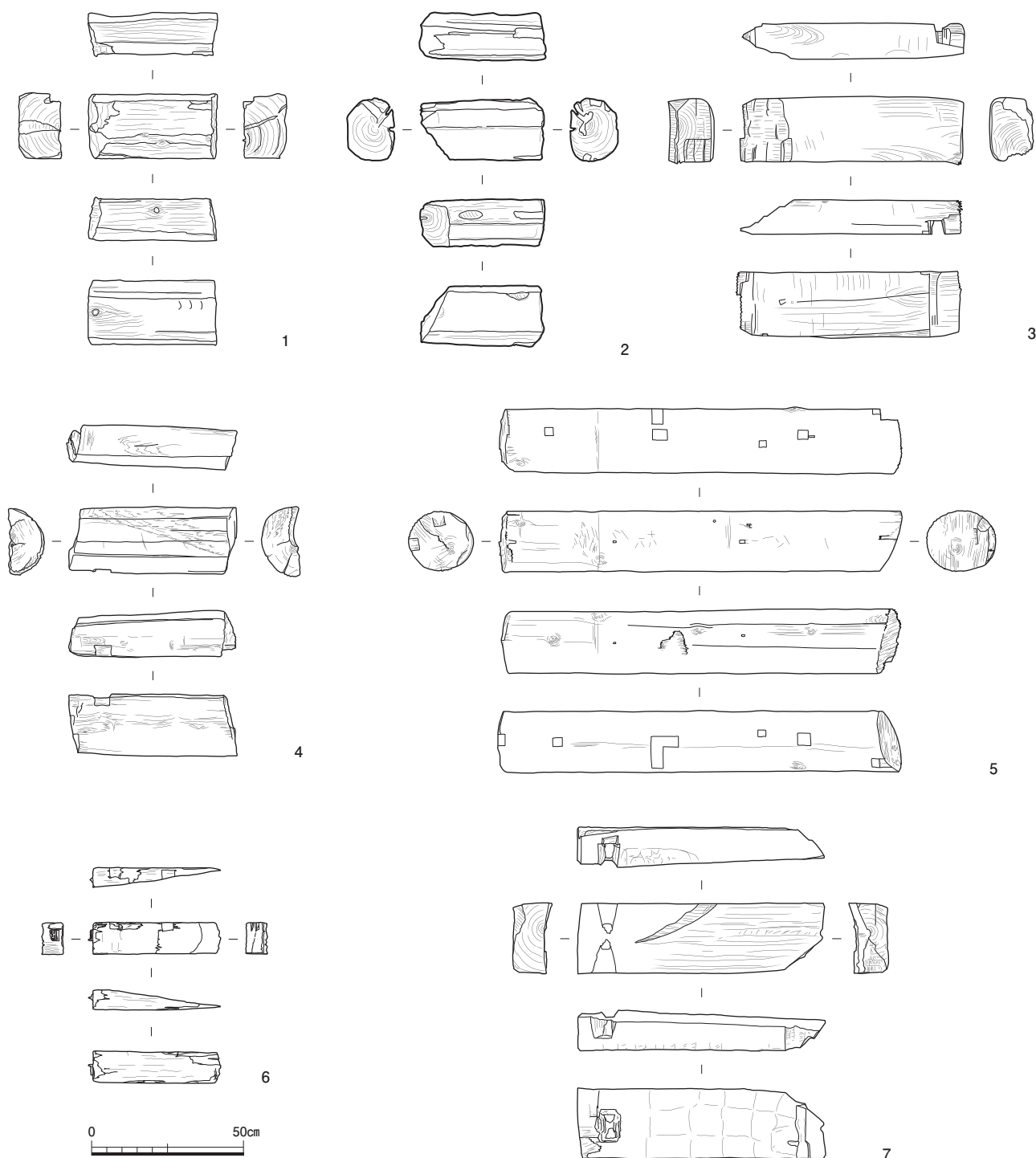


図247 SX1150出土建築部材 1 : 20

る。両側面はチョウナによって平滑に仕上げる。西面木口(図左)は垂直に切断し、東面木口(図右)はヨキ(刃幅6.0cm)で杭状に切断する。下面は平滑に仕上げ、チョウナ(刃幅9.0cm)による加工痕が明瞭である。下面にはエツリ穴に貫通する仕口があり、粗加工ながらも、エツ

リ穴と同時期の加工とみられる。部材形状から、角柱を半裁し、両端を切断した転用材と考えられる。

以上、建築部材と認められた7点のうち、垂木の転用材とみられる1点(部材6)を除いて、6点は柱の転用材であった。

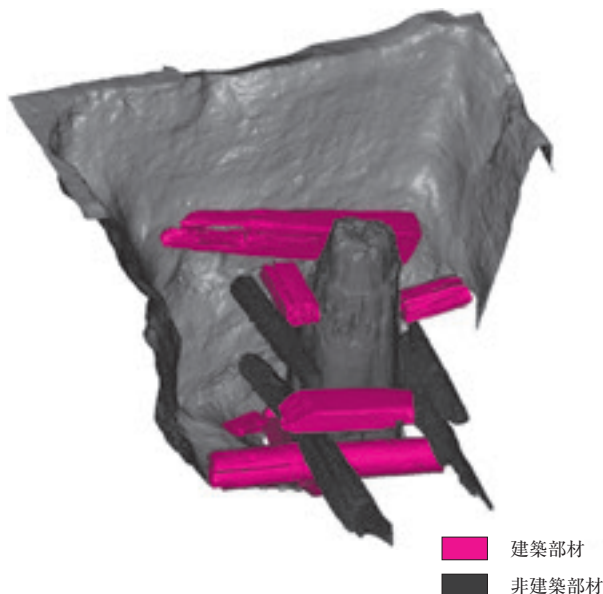


図248 掘立柱SX1150から出土した部材の位置関係

なお出土時の井桁状に組み上げられた状態において、これらの部材構成には一定の傾向が見いだされた。出土時に部材の長手を南北方向に向けた部材では、7点中5点が建築部材であり、長手を東西方向に向けた部材では、6点中4点が非建築部材であった。柱根の底部にある2点（部材6、7／図247-1および2）はともに建築部材であるが、柱の水平を保つために据えられた飼物や楔と考えられるため、井桁の構成部材ではない。この傾向の具体的な理由は不明ながらも、安定性などを考慮した根固めの構法に関連する可能性もあり、古代の建設・土木技術を知るうえでも示唆に富むものといえよう。

（福嶋啓人）

## 5 掘立柱SX1150の評価

掘立柱SX1150は3方向に組み合う同規模の柱穴が検出されておらず、独立した柱穴の可能性が高い。柱根は掘方内の多くの部材によって根固めが行われていた。また15世紀後半までの遺物を含むL字溝SD1147と重複し、これより古い。そこで、本稿では古代もしくは中世における西大寺の幢幡遺構<sup>7)</sup>としての可能性について検討を加えたい。

掘立柱SX1150は薬師金堂の南東に位置する。まずは掘方底面のおおよその中心座標（X=-144,825.6、Y=-20,183.3）と西大寺伽藍中軸線及び一条条間路の推定心からの距離

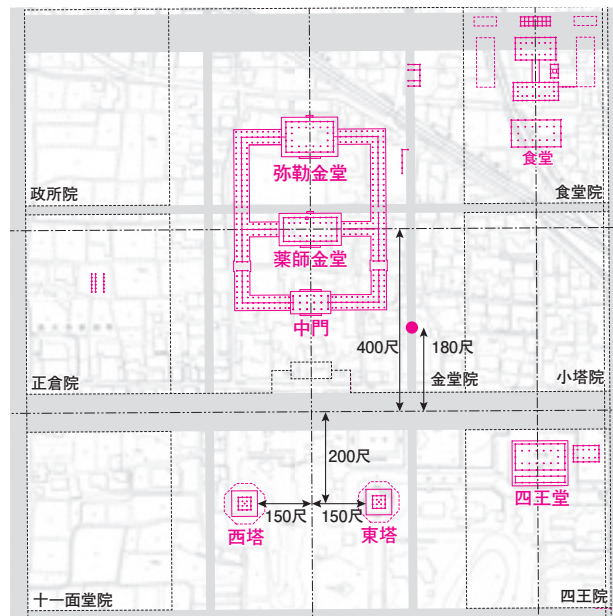


図249 掘立柱SX1150の位置（赤丸）

を『紀要 2007』の式<sup>8)</sup>を基に算出する。

西大寺伽藍中軸線を示す式（ $X = -\cot 0^\circ 19' 50''$   $Y = -3654926.334$ ）および一条条間路心を示す式（ $X = -\tan 0^\circ 18' 50''$   $Y = -144767.549$ ）との距離をそれぞれ算出すると、掘立柱SX1150の位置は西大寺伽藍中軸線より東へ229尺、一条条間路の推定心から北へ180尺<sup>9)</sup>となる。この数値と、西大寺金堂院の復元検討の結果（『紀要 2014』）とを勘案すると、掘立柱SX1150は金堂院回廊の東南に位置すると想定できる（図249）。

宝亀11年（780）成立の「西大寺資財流記帳」（西大寺文書。以下「資財帳」と略称、〈〉は割注<sup>10)</sup>）によると、

金堂院

薬師金堂一字 長十一丈九尺。広五丈三尺。

・・・中略・・・

弥勒金堂一基〈二重長十丈六尺。広六丈八尺。〉

・・・中略・・・

雙廊一周〈一百十七丈二尺。東西各軒廊。〉

中門一字〈長七丈八尺。広三丈。〉

東西脇門二字〈各長二丈。広二丈八尺五寸。〉

中大門一基〈二重。長九丈。広三丈七尺。〉在鐸八口。

東西樓門二基〈各長二丈六尺。広二丈。〉

塔二基〈五重。角十五丈。〉

幢六株〈二株无鳳形〉

在金銅鳳形四翼〈二破。〉壯柱並金銅頭。

とあり、金堂院の建物に並んで幢が記されていることが確認できる。また、『東大寺要録』巻第七雜事章第十の「東大寺権別当実忠二十九ヶ条事」<sup>11)</sup>には、

一、奉立西大寺御齋会廻幢事。

合廿基。〈二各長八丈 六各長七丈 十二各長五丈〉

右件幡。奉 勅旨。率東大寺工等。七箇日間削造。

即一日内起立已畢。維時神護景雲三年歲次己酉也。

とあり、幢を立てた記録が確認できる。前述の「資財帳」に見える幢と同一のものを指すかは不明であるが、数の違いから別のものを指す可能性がある。このように古代の西大寺においては、文献史料から幢についての存在が確認できる。

さらに同時期に称徳天皇によって創建された尼寺である西隆寺の発掘調査（『紀要 2001』）においても、幢幡遺構の可能性のある掘立柱が2基検出されている。中心伽藍を囲む回廊の西南隅に位置しており、今回検出した掘立柱SX1150の位置と類似する。

今回検出した掘立柱SX1150は直径約0.7mの柱の周りに13点の部材を井桁状に組むことによって柱を強固に直立させることを意図していたとみられる。また、周囲に組み合う柱穴が展開せず、独立した遺構であること、一条条間路の推定心から北へ180尺のところに位置する点などから、幢幡遺構の可能性を指摘しておきたい。

なお掘立柱SX1150の抜取穴（図230）とみられる穴から腐食の激しい部材片が1点出土している。支柱の可能性が考えられ、幢幡構造を考える上で注目されよう。

## 6 おわりに

本調査地は平城京右京一条三坊七坪にあたり、西三坊坊間路東側溝の計画ラインが調査区内に入ることが想定されていた。調査区中央を縦断する南北溝SD1146を西三坊坊間路東側溝と想定したものの、埋土の最下層からは奈良時代の遺物が少なく、かつ中世の土器が多量に出土したため、断定には至らなかった。

また、調査区南半で検出した掘立柱SX1150は、調査区内で同規模の柱穴がなく、独立した遺構であると認定し、西大寺の幢幡遺構である可能性を指摘した。しかしながら掘立柱SX1150からは土器や瓦などの出土遺物が乏しく、遺構の重複関係から中世以前とする時期比定に留まった。一方で、これまでの調査で明らかにされてき

ように、西大寺の中心伽藍である薬師金堂の東西中軸が一条条間路の推定心から北へ400尺に位置することが指摘されており<sup>12)</sup>、今回、掘立柱SX1150が一条条間路の推定心から北へ180尺に位置することとを考え合わせると計画的な配置と理解することも可能である。今後は、掘立柱SX1150から出土した部材の放射性炭素年代測定などを併せておこない、より正確な時期比定をおこないたい<sup>13)</sup>。

本調査では、中世の西大寺旧境内における土地利用や西大寺造営以前の平城京右京域の条坊道路を検討する上で基礎となる情報を得ることができた。

（浦）

### 註

- 1) 掘立柱SX1150から出土した部材の位置関係については、SfM-MVS (Structure from Motion and Multi-View Stereo) 技術を用いて立体的な記録を残すことが出来た。詳細はp54を参照されたい。
- 2) 奈良市埋蔵文化財調査センター編『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料－』奈良市教育委員会、2014。
- 3) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983。
- 4) 北京芸術博物館編『中国龍泉窯』中国華僑出版社2015の189など。
- 5) 佐藤重聖「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究X I』日本中世土器研究会1996。
- 6) 報告する樹種については浦がサンプリング及びプレパラートを作製し、同定は年輪年代学研究室の星野安治がおこなった。
- 7) 下部構造からは「幢」もしくは「幡」の区別がつかないため幢幡遺構と呼称すべきという提唱に則り、幢幡遺構と呼称する。海野聡「古代寺院の幢幡による荘厳とその構造」『条里制・古代都市研究』34、条里制・古代都市研究会、2018。
- 8) 林正憲「4 まとめ－薬師金堂の復元に向けて－」『紀要 2007』p.142 2007。この式によると西大寺の中心伽藍である薬師金堂。
- 9) 1尺=0.296mを採用した。
- 10) 『奈良六大寺大観 第14巻 西大寺 全』岩波書店、1973による。
- 11) 筒井英俊校訂『東大寺要録』東大寺要録第七巻 雜事章第十 国書刊行会 pp.269-270 1971。
- 12) 前掲9。
- 13) なお、出土した柱根（図240）は樹皮を残していたが、根に近い年輪に乱れがあり、年輪年代による年代決定にはいたらなかった。